

10.マラッカ



マレー半島の西海岸マラッカ州の州都としてマラッカは位置する。かつてのマラッカ王国(1396年)から独立宣言するまで様々な国の統治下であり、多様な文化が溶け込んだ街である。港湾都市として地政学上の重要拠点としてポルトガル、オランダ、イギリス、1941~1945年には日本も占領統治していた。シンガポールにその拠点が取って代わるまで港湾都市として機能していた。

街の中心に位置し赤い建物に囲まれ時計台や噴水のある「オランダ広場」、旧来の要塞跡の「ファモサ要塞跡」、世界の主要都市の共通例に漏れず中心部を流れる「マラッカ川」の存在、中華系移民との融合の歴史「ババ・ニョニャ・ヘリテージ・ミュージアム」、キリスト教の影響及び東アジアの宣教拠点として「マラッカキリスト協会」「セントポール教会跡」、イスラムの祈りの場であり海辺に建つ「マラッカ海峡モスク」、航路経由地「マラッカ海峡」と、いかにそれぞれの時代の影響を経た激動の歴史を体現してきたかが分かる街並みだった。

「ババ・ニョニャ・ヘリテージ・ミュージアム」では中華系移民とマレーシア女性との歴史を辿ることができ、新天地でいかに生きるかを考えながら、独自の文化形成を進めていたかを感じました。

街中に再開発が乱立するエネルギッシュなクアラルンプールと比較し、歴史の深さやどこか落ち着きのあるマラッカ観光だった。